

## 平成27年度活動報告書(1/4)

学部・委員会名	農学部
学部長・委員長等氏名	鈴木 敏郎
担当所管	農学科
テーマ	コース制、研究室体制の検討

<b>1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）</b>
学部・学科改組後の平成29年度以降の新体制に対応するための方策について再検討する。
<b>2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）</b>
学科内にワーキンググループを立ち上げ、毎月一回検討会を開催し、定期的に学科会議に諮った。
<b>3. 達成度を判断するための指標</b>
今年度末に検討した結果を文書にて発表する。
<b>4. 成果・評価</b>
<p>■成果</p> <p>平成30年度に行われる農学部の学部・学科改組を見据えての農学科のコース制、研究室体制について検討した結果、コース制の廃止、農業生産科学コースの改編、園芸科学コースの研究室体制の見直しをはかることになった。これらのことについて、現在も引き続いて検討している。あわせて、カリキュラムについても見直しをし、新しいカリキュラム作成に着手した。</p> <p>■評価（5～1で記載してください）</p> <p>4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた</p>
<b>5. 課題及び改善事項</b>
学科改革改善にむけて、コース制、研究室体制ならびにカリキュラムについてすみやかに検討する。
<b>6. 平成28年度への継続の有無</b>
有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

## 平成27年度活動報告書(2/4)

学部・委員会名	農学部
学部長・委員長等氏名	鈴木 敏郎
担当所管	農学科
テーマ	高校との連携強化と学生の確保

<b>1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）</b>
模擬講義や学科説明会などへの積極的な対応により、優秀な学生確保に努める。
<b>2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）</b>
申し込みがあった段階で派遣教員を決定する。キャンパス見学会における研究室主催のマナビ体験の検討、模擬講義およびキャンパス見学ツアーに学科として積極的に参画する。 個人申込みによる研究室見学、進学相談についても積極的に対応する。
<b>3. 達成度を判断するための指標</b>
出張講義の実施実績、キャンパス見学会時のマナビ体験、模擬講義の実績をもって達成度を判断した。また、来年度の受験者数、入学者数についても達成度を判断するための指標とする。
<b>4. 成果・評価</b>
<p><b>■成果</b></p> <p>昨年度と比べ4校多い、14の高校に対して出張講義を行った（2015年度（平成27年度）出張講義担当者一覧、資料1）。短期大学部については編入学希望者を集めてのそれぞれの学科説明会にも参加した（2015年度（平成27年度）学科説明会担当者一覧、資料2）。また、キャンパス見学会における研究室主催のマナビ体験、キャンパス見学ツアーについても積極的に参画した（2015年度（平成27年度）農学部キャンパス見学会各プログラム集計表、資料3）（農学部キャンパス見学会 模擬講義一覧、資料4）。このほかには19件の個人見学、2回の学科合同説明会および高校4件の団体見学に対応したほか、大学進学博2015やサイエンスカフェ（2015年度（平成27年度）その他広報活動、資料5）といった広報活動にも参加した。</p> <p>以上のことから、今年度は当初の方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた。</p> <p><b>■評価（5～1で記載してください）</b></p> <p>4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた</p>
<b>5. 課題及び改善事項</b>
学科教員に対して出張講義、学科説明会等の積極的な参加を促す。
<b>6. 平成28年度への継続の有無</b>
有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

## 平成27年度活動報告書 (3/4)

学部・委員会名	農学部
学部長・委員長等氏名	鈴木 敏郎
担当所管	農学科
テーマ	農業教育への動機づけ

<b>1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）</b>
学生に対して、農業、農学を学ぶ動機付けを入学直後から行う。
<b>2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）</b>
農業に関連するビジュアル資料などを用いて、フレッシュマンセミナー、共通演習に組み込んで対応した。また、新入生だけでなく、2年生以上の学生についても、「農業ビジネスデザイン（一）、（二）」の履修を促す。
<b>3. 達成度を判断するための指標</b>
フレッシュマンセミナーや共通演習でレポートを提出させ、クラス担任による添削指導を通して学生とのコミュニケーション強化を図る。とりわけ、「農業ビジネスデザイン（一）、（二）」については、学外農業研修・実習実施後の実習日誌、引率教員による評価および学外農業研修・実習報告会（学内公開とする）におけるプレゼンテーション（報告書も含む）によって判断する。
<b>4. 成果・評価</b>
<p>■成果</p> <p>一年生に対しては「農業ビジネスデザイン（一）、（二）」の履修を促し、二年生以上の学生に対しても就農者育成支援プログラムへの積極的参加をはたらきかけたことによつて、予想を上回る数の学生が学外での農業体験実習、見学会に参加した（平成27年度就農者育成支援プログラム 実習実施一覧、資料6）。</p> <p>参加後には報告書の提出を義務付け、教員が評価し、事後の指導を行っている（農業ビジネスデザイン（一）見学会報告書、資料7）。同様にフレッシュマンセミナー、共通演習についてもレポートを提出させ、クラス担任による添削を含めての指導を徹底した。</p> <p>以上のことから、今年度は当初の方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた。</p> <p>■評価（5～1で記載してください）</p> <p>4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた</p>
<b>5. 課題及び改善事項</b>
農業、農学を学ぶ動機付けとしての「農業ビジネスデザイン（一）、（二）」の内容を充実させる必要がある。担当教員の増員についても検討する必要がある。
<b>6. 平成28年度への継続の有無</b>
有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

## 平成27年度活動報告書 (4/4)

学部・委員会名 農学部

学部長・委員長等氏名 鈴木 敏郎

担当所管 農学科

テーマ 教員と学生間のコミュニケーション強化

※テーマは、具体的な計画・実行・点検・改善のためのPDCAサイクルの基本単位です。

<b>1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）</b>
学生とのコミュニケーションを強化する。
<b>2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）</b>
教員のオフィスアワー設定を促すとともに、フレッシュマンセミナーの時にクラス懇談会を定期的に開催するほか、悩みを抱えている学生に対しては、クラス担任をはじめ、学科長、主事が相談にのるなどの対策を講ずる。また、フレッシュマンセミナーや共通演習でレポートを提出させ、クラス担任による添削指導を通して学生とのコミュニケーション強化を図る。
<b>3. 達成度を判断するための指標</b>
クラス懇談会実施後にはフレッシュマンセミナーや共通演習でレポートを提出させ、クラス担任による添削指導を行う。
<b>4. 成果・評価</b>
<p>■成果</p> <p>4については、フレッシュマンセミナー、共通演習についてもレポートを提出させ、クラス担任による添削を含めての指導を徹底した（農学科共通演習レポート、資料8）。 以上のことから、今年度は当初の方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた。</p> <p>■評価（5～1で記載してください）</p> <p>4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた</p>
<b>5. 課題及び改善事項</b>
学生とのコミュニケーションをいっそう強化するため、クラス懇談会の定期的な実施をはじめ、個別面談についても真摯に取り組みたい。
<b>6. 平成27年度への継続の有無</b>
有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

## 平成27年度活動報告書(1/6)

学部・委員会名	農学部(畜産学科)
学部長・委員長等氏名	学部長 鈴木 敏郎
担当所管	畜産学科
テーマ	教育課程編成の改善・ディプロマポリシーを実現するための取り組み

<b>1. 目標(改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など)</b>
畜産に関わる広い領域で貢献し得る人材の養成を目的とする本学科は、単位を取得し、社会人としての基本的な能力に加え、畜産・動物関連産業で役立つ知識と知恵を備えた学生に学位を授与する。このディプロマポリシー実現のために従来の畜産学を軸に、そこから育った新領域を含めた動物に関する総合的な学問体系を網羅し得る教育課程編成の改革改善を実施する。また、この活動により学科志願者の確保と畜産学のより一層の発展を目指す。
<b>2. 実施計画(具体的な方法・手段とスケジュールなど)</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学科名称 “家畜の生産”にのみ特化したイメージから脱却する名称の検討</li> <li>・ 分野・研究室体制 各研究室がカバーする領域を、より明確に伝える体制および名称の検討</li> <li>・ カリキュラム 知識を実践で活かせる能力を体得させるための再編成を検討 (選択必修科目「化学」「生物」を含む座学と実験、実習、演習の連携強化)</li> </ul>
<b>3. 達成度を判断するための指標</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 受験者数や併願先の動向状況</li> <li>・ 学生自身が習得した知識を駆使し、考え行動してまとめ上げる「卒業論文」の作成過程、本人発表および提出の状況</li> <li>・ 学科指定の求人数の動向状況</li> </ul>
<b>4. 成果・評価</b>
<p>■ 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学部改組に向けて学科名称、研究室体制について検討中。(新体制へ移行後に受験者数の動向状況調査)</li> <li>・ 継続して科目間の連携を意識した授業展開を進行中。研究室へ所属後の専攻実験、卒論研究への取り組みが順調に行える状況に発展している。</li> <li>・ 学科指定の求人数の動向状況について・・・農大キャリアナビで保管されている情報が揃い次第分析予定。*2/9 現在内定率 87.2% (農学部 81.3%)</li> </ul> <p>■ 評価(5~1で記載してください)</p> <p>3 方針に基づいた活動ができた</p>
<b>5. 課題及び改善事項</b>
新体制における教職課程を含むカリキュラム編成。

6. 平成 28 年度への継続の有無
--------------------

有
---

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

## 平成27年度活動報告書(2/6)

学部・委員会名	農学部(畜産学科)
学部長・委員長等氏名	農学部長 鈴木 敏郎
担当所管	畜産学科
テーマ	地域への貢献

<p><b>1. 目標(改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など)</b></p> <p>畜産学科の持つ英知、技術および人材を駆使した地域連携と地域貢献を図る。</p> <p>対象として、本学科の所属キャンパスの立地する厚木市、神奈川県は元より、畜産の第一次産業領域を請け負う地方も含め、教育支援とともに畜産を通じた振興支援を実施し、地域の活性化を図る。これらの活動により畜産の継続的な発展・推進に貢献する。</p>
<p><b>2. 実施計画(具体的な方法・手段とスケジュールなど)</b></p> <p>地域および学校(小、中、高)、地方の自治体、企業などに対し、依頼を受けた事案への対応とともに、能動的な支援を行う。具体的な実施内容は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高校などでの出前授業(模擬講義)への講師派遣</li> <li>・講習会、講演会への講師派遣</li> <li>・業務相談への対応・支援</li> <li>・委託研究への対応</li> </ul>
<p><b>3. 達成度を判断するための指標</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高校などでの出前授業の実施状況</li> <li>・講習会・講演会の実施状況</li> <li>・業務相談の実施状況</li> <li>・研究データの解析・評価の実施状況</li> <li>・開発された技術あるいは製品 ※)「守秘義務」が生じる事案については注意を要する</li> </ul>
<p><b>4. 成果・評価</b></p> <p>■成果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・出前授業: 5件 神奈川県立生田高校、神奈川県立大磯高校、神奈川県立伊志田高校、東京都立若葉総合高校、東京都立小石川高校</li> <li>・講習会・講演会: 12件 あつぎ協働大学①「これからの食農」、同②「農学において動物研究が秘める可能性」、厚木地区食品衛生協会「肉食と健康」、農水省中央畜産技術研修会(畜産統計処理)「データの分析と検定」、家畜改良センター家畜人工授精(豚)講習会「家畜の育種」、日本農林漁業振興会(農林水産祭シンポジウム)「DNA 情報を用いた新しい家畜育種」、北海道体外受精卵移植技術者会議「なぜ、追い移植は効果があるのか?妊娠認識・免疫寛容の視点からの考察」、宮城県養豚研究会「畜産の明日を担う「飼料米」という農業革命」、都丸養鶏研究会「飼料用米の利用拡大で採卵養鶏の展望を拓く」、会田共同養鶏組合「飼料用米の増産と生産コスト低減方策」、東京農大東日本プロ相馬現地報告会「飼料用米・稲WC Sの増産へ向けて」、日本養豚学会北海道支部「微粉碎粗米の豚への給与の増体成績と肉質について」</li> <li>・業務相談: 12件 日本通運株式会社「飼料用米の生産コストについて」、日本養鶏協会「加工卵技術開発事業について」、太洋工業株式会社「飼料米用の屋外保管包装材の開発について」、</li> </ul>

日本ハム・ソーセージ工業協同組合「国産畜産物の新たな市場獲得のための技術開発促進事業について」、牧歌「羊の内部・外部寄生虫対策について」、Jens H. Jensen「烏骨鶏への飼料用米給与について」、野迫昌平「TPP 参加による鶏肉関税撤廃の影響分析と対応策について」、全農「飼料用米の共同研究について」、東北大学大学院農学研究科「飼料設計プログラムについて」、(農)蔵王ファーム「養豚での飼料用米活用法について」、昭和産業株式会社「飼料用米の増産方策について」、富山県畜産試験場「県産牛肉を用いた食品開発について」

・研究データの解析・評価：1件 雪室貯蔵評価試験（新潟・直江津）

■評価「5～1で記載してください」

4

#### 5. 課題及び改善事項

技術あるいは製品の開発が未実現である

#### 6. 平成28年度への継続の有無

有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。



## 平成27年度活動報告書(3/6)

学部・委員会名	農学部
学部長・委員長等氏名	農学部長 鈴木 敏郎
担当所管	畜産学科
テーマ	社会・産業への貢献

## 1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）

本学科の持つ英知、技術および人材を用いた社会・産業貢献として、職業人の育成および研究成果の情報発信・実利用の推進を積極的に行う。また、市民向け教養講座などで畜産学の身近な話題などを提供する。

## 2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）

- ・実学を身につけた人材の育成と社会への還元（26年度就職率82%）と就職率の向上
- ・研究成果情報の公表（26年度の学会誌論文21件、学会発表64件）
- ・共同・委託研究の受け入れ（26年度なし）は1件以上
- ・市民向け教養講座への参画

## 3. 達成度を判断するための指標

- ・卒業生の就職状況
- ・研究成果の発信・実利用の状況
- ・共同・委託研究の実施状況
- ・市民向け教養講座の実施状況

## 4. 成果・評価

## ■成果

・実学を身につけた人材の育成と社会への還元：H27年度卒業生208人のうち就職者181人（就職率87.2%）、進学・その他が24人で計205人の進路が決定した。（別添・資料1）

就職先の状況は、農業（畜産業）29人（16%）、食品製造業26人（14%）、小売業20人（11%）、サービス業17人（9%）、卸売業16人（9%）、医療業7人（4%）、情報通信5人（3%）、公務員4人（2%）、金融業3人（2%）、教員2人（1%）である。

昨年度に比べると就職率が5ポイントアップし、就職先は農業（畜産業）がトップとなったのが特徴である。これはディプロマシーに掲げている畜産業を支える人材育成と合致する成果である。

・研究成果情報の公表：27年度の学会誌論文は42件で昨年度に比べて倍増した。学会発表は60件で昨年度とほぼ同件数であった。（別添・資料2）

- ・共同・委託研究の受け入れ：3件（全農、エバラ食品工業、富士食品）
- ・市民向け教養講座への参画：あつぎ協働大学

## ■評価（5～1で記載してください）

5. 課題及び改善事項
-------------

概ね計画は達成できたが、社会・産業への発信力が弱い
---------------------------

6. 平成 28 年度への継続の有無
--------------------

有
---

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

## 平成27年度活動報告書 (4/6)

学部・委員会名	農学部（畜産学科）
学部長・委員長等氏名	学部長 鈴木 敏郎
担当所管	畜産学科
テーマ	グローバル化の推進

<b>1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生が国外や国際交流に興味をもつ環境を整えることで、国外の農業や文化について興味をもたせる</li> <li>・ 外国人学生の受け入れにより、教育研究の向上や国家間の友好関係の強化に繋げる</li> <li>・ 国際学会への参加や国際雑誌への投稿などにより、国外研究者との学術交流を深める</li> </ul>
<b>2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「世界学生サミット」への参加の呼び掛けを授業中や掲示板にて実施する</li> <li>・ 本学の「海外派遣プログラム」への参加の呼び掛けを授業中や掲示板にて実施する</li> <li>・ 外国人学生の受け入れ</li> <li>・ 国際学会への参加や国際雑誌への投稿の推進・支援を研究室内にて実施する</li> </ul>
<b>3. 達成度を判断するための指標</b>
<p>以下の項目に挙げた数を達成度の判断基準とする</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「世界学生サミット」、「海外派遣プログラム」への参加者数：7名</li> <li>・ 外国人学生の受け入れ：若干名</li> <li>・ 国際学会への参加数：3名</li> <li>・ 国際雑誌への投稿数：5本</li> </ul>
<b>4. 成果・評価</b>
<p>■ 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 短期留学者の状況：5名</li> <li>・ 外国人学生の受け入れ状況：1名</li> <li>・ 国際学会への参加者数：1名 (Ovarian Club VI Meeting)</li> <li>・ 国際雑誌への投稿数：6本 (Cell Physiol Biochem, Reproduction, Theriogenology, J Reprod Dev, Scientific Reports, PLoS One)</li> </ul> <p>■ 評価（5～1で記載してください）</p> <p>5</p>
<b>5. 課題及び改善事項</b>
特記事項無し
<b>6. 平成28年度への継続の有無</b>
無 目標が複数年にわたりほぼ達成できたため

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

## 平成27年度活動報告書 (5/6)

学部・委員会名	農学部（畜産学科）
学部長・委員長等氏名	学部長 鈴木 敏郎
担当所管	畜産学科
テーマ	在学生対応の強化

<b>1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）</b>
1,2年生は3,4年生に比べると学科教員との接点の脆弱性が否めない。そこで、教員と学生の接点の強化や開講科目の質の向上による在学生の満足度の確保を図る。
<b>2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 少人数クラス担任制導入の検討</li> <li>・ 教員の授業参観の実施</li> <li>・ 優秀卒業論文発表会の開催、研究室ごとの研究成果の公開</li> <li>・ 学生有志団体『畜友会』の活動指導体制の充実</li> </ul>
<b>3. 達成度を判断するための指標</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 所属研究室分けの志望優先度の集計</li> <li>・ 卒業時に実施する学生満足度アンケートの集計</li> <li>・ 畜友会年間事業計画・収支決算</li> </ul>
<b>4. 成果・評価</b>
<p>■成果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 少人数クラス担任制導入の検討 学生個々の認識や教務課での案内により昨年に引き続き定着している。</li> <li>・ 教員の授業参観の実施 昨年に引き続き積極的に取り組めていないので、実現性について考慮の上計画から除外する。</li> <li>・ 優秀卒業論文発表会の開催、研究室ごとの研究成果の公開 本年は学生から5件、学科外から1件、学科教員から多数の議論、助言があり盛況だった。</li> <li>・ 学生有志団体『畜友会』の活動指導体制の充実 昨年同様、年間事業の進行はスムーズに行えた。また、体育祭で総合優勝を果たした</li> </ul> <p>■評価（5～1で記載してください）</p> <p>4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた</p>
<b>5. 課題及び改善事項</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教員の授業参観の実施は、活動計画からは除外することとする。</li> </ul>
<b>6. 平成28年度への継続の有無</b>
有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

## 平成27年度活動報告書(6/6)

学部・委員会名	農学部(畜産学科)
学部長・委員長等氏名	鈴木 敏郎
担当所管	畜産学科
テーマ	卒業生対応の強化

<b>1. 目標(改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など)</b>
多くの卒業生の来学の場合および学科からの同窓会の活動支援が少ないため、その拡充を目指す。第一歩として、ホームカミングデーへの参加増員と卒業生への連絡拡充を図る。
<b>2. 実施計画(具体的な方法・手段とスケジュールなど)</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>ホームカミングデーへの参加呼びかけ 研究室毎あるいは同窓会 HP から6月20日の開催を広く通知する。</li> <li>卒業生の連絡網の構築 同窓生の活動支援として連絡、案内等を多くの方に知らせるための卒業生の連絡先、名簿の確認を各研究室で協力して実施する。拡充と更新を確認し、管理法を検討する。</li> </ul>
<b>3. 達成度を判断するための指標</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>ホームカミングデーへの卒業生の参加者数50名を目標とする</li> <li>各研究室で開催するOB会への参加状況1研究室年間20名を目標とする。</li> <li>収穫祭への来訪者数学科全体として目標50名とする</li> <li>名簿の管理法を学科会議で議題にする</li> </ul>
<b>4. 成果・評価</b>
<p>■成果</p> <p>ホームカミングデーで畜産学科卒業生は50名以上であった。 各研究室で開催するOB会への参加状況1研究室年間20~50名だった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>収穫祭への来訪者数学科全体として目標50名以上であった。 名簿の管理法は学部改組に伴う学科関連書団体の会費との関連で学科会議(第12回学科会議)にて議題となった。</li> </ul> <p>■評価(5~1で記載してください)</p> <p>5 方針に基づいた活動ができた</p>
<b>5. 課題及び改善事項</b>
全て目標を達成した
<b>6. 平成28年度への継続の有無</b>
なし

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

## 平成27年度活動報告書 (1/3)

学部・委員会名 農学部バイオセラピー学科学部長・委員長等氏名 宮本 太

担当所管 \_\_\_\_\_

テーマ 学生の創造力を育てる実践的教育・研究環境の改善と整備**1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）**

本学科で学び得た知識と技術を活かすためには、社会の場で実際に生き物を活用した活動を通して応用することである。その応用力を持った人材が、社会と生き物・環境・人をつなぎ、豊かな社会の創造に貢献できることを目標としている。本テーマは生き物の利活用を実践する教育および実験・実習の基盤となる環境の改善と整備をはかることが目的である。整備環境には、学生指導といったソフト面と実験実習で活用する機器備品設備といったハード面の両側面が該当する。充実した学生指導体制を配備するとともに、体系的な機器備品設備で各専門分野を横断した創造性豊かな実践的教育と研究の発展を目指す。

**2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）**

## 1. 学生の教育・指導体制の整備

教員との直接的な関わりが少ない研究室所属前の1・2年次生に対し、オフィスアワーの活用を促進する。学科教員と個人のレベルで積極的に関わることで学科の人材育成目標と社会的意義を理解し、将来の展望を考える機会を与える。学科教員オフィスアワー一覧の掲示および紙媒体の学生配布によって開かれた研究室と教員の存在を示し、活用を促す。

研究室所属学生に関しては、学科教員構成の変更に伴う課題の解決をはかる。2年次学生の3年次所属研究室について研究室の指導体制に応じた配分を研究室選択担当委員が中心となり10月に検討する。

## 2. 機器備品環境の改善と整備

機器備品整備検討委員会を設置し、各研究室の所有する機器備品を明らかにし、学部および大学院の教育・研究環境の現状確認を行う。その結果に基づき教育・研究環境の改善・推進を検討した計画的な環境改善および機器備品更新案の作成を行う。

**3. 達成度を判断するための指標**

- ・ 学科教員オフィスアワー一覧の作成と開示状況
- ・ 機器備品整備検討委員会、研究室選択委員会、実験実習検討委員会の活動状況
- ・ 共通機器の利用状況
- ・ 諸会議（合同学科長会、教授会、農学部連絡会議、学科会議、専攻内会議等）議事録集の作成

**4. 成果・評価****■成果**

## 1. 学科教員オフィスアワー一覧の作成と開示状況

- ・ 教員オフィスアワー活用へ取り組み

現状の教員オフィスアワー確認システムでは①学生がその存在に気がつきにくいこと、②他教員のオフィスアワーを認知しにくいことが問題点としてあげられる。この問題を改善

し、学生が教員のオフィスアワーの周知と活用を促進する目的で学科教員オフィスアワーの一覧を作成した。これにより各教員はお互いのオフィスアワーを認識できるとともに学科掲示版に通年の掲示を行うことで学生による利用促進が図られた。【資料 1, 2】

## 2. 機器備品整備検討委員会、研究室選択委員会、実験実習検討委員会の活動状況

### ・ 研究室選択委員会の活動

研究室選択委員（2名）を中心に学科会議にて平成28年度の研究室指導体制および2年次学生の希望を考慮した配属の検討が行われた。その結果、2年次生160名のうち第一希望の研究室に所属できた学生が157名（98.1%）と十分な成果を上げた。以上より、研究室選択委員会が機能し、教員構成と学生の希望に応じた研究室所属学生配属が実施された。【資料3】

### ・ 機器備品整備検討委員会の設置

平成27年6月の会議において分野主任3名からなる「機器備品整備検討委員会」を設置した。【資料4】

## 3. 共通機器の利用状況

### ・ 機器備品整備検討委員会による活動

同委員会が学科各研究室の所有する教育研究機器の整備・利用状況の確認を行った。これにより学科全体で共有して使用できる機器の整備状況が明らかになり、将来の学科予算を投じた機器整備計画による教育・研究環境の改善が可能となった。【資料5】

### ・ 1, 2年次生実験実習用予算の設置

これまで1, 2年次生の実験実習科目（農業実習（一）および（二）、生物学実験、分野別基礎実験実習）には実習内容や消耗品の有無にかかわらず一定額の予算を担当研究室に配分してきた。これを改め平成28年度より実験実習の内容に応じた予算の執行を目的として新年度予算編成時に必要物品と必要額を申請し、学科会議で検討の上予算配分するシステムを構築した（学科教材予算の設定）。これにより1, 2年生への教育費の適正な執行と少額の共通実験機器類（電子天秤、ピペット等）の配備による教育内容の充実化が図られる。これに加えて授業科目において使用する教材の予算費目も設定し、座学と実習で教育内容の改善を図った。【資料6, 7】

## 4. 諸会議における活動と改善の記録

### ・ 本テーマを实践する取り組みについて会議で話し合い確実に実行に移した。【資料1, 3, 4, 5, 6】

## ■ 評価（5～1で記載してください）

4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた。

## 5. 課題及び改善事項

### 1. 学科教員オフィスアワー掲示の効果の検証

本年度のオフィスアワーの掲示は、とりわけ教員との関わりが希薄になりがちな1, 2年生に対してコミュニケーション機会を積極的に提示することが目的であったが、その効果を客観的に検証するシステムが用意できていなかった。そのため改善事項としてアンケート等による効果の検証を検討する。

### 2. 機器備品環境の改善と整備

本年度、機器備品検討委員会を設置することで学科に配備されている機器の現状とその利用状況は把握することができた。今後はこの情報を基盤に共同利用のシステム構築と新規共通機器配備による教育研究環境の充実が検討される必要がある。

## 6. 平成 28 年度への継続の有無

有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

資料 1 「学生の教員オフィスアワー活用への取り組み」に関する学科

資料 2 「学生の教員オフィスアワー活用への取り組み」に関する掲示物

資料 3 「研究室所属学生配属の検討」に関する学科会議議事録の抜粋

資料 4 「機器備品整備検討委員会の設置」に関する学科会議議事録の抜粋

資料 5 「機器備品整備検討委員会の設置」に関する委員会報告

資料 6 「1, 2 年次生実験実習予算の設置」に関する学科会議議事録の抜粋

資料 7 平成 28 年度 バイオセラピー学科 教材予算内訳



## 平成27年度活動報告書 (2/3)

学部・委員会名 農学部バイオセラピー学科学部長・委員長等氏名 宮本 太

担当所管 \_\_\_\_\_

テーマ 生物を利活用する専門知識と技術習得に向けた教育体系の改善**1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）**

本学科では1・2年次でバイオセラピー学6分野に関わる専門知識と技術の習得、農学・生物学といった基礎学問の知識と技術の習得を目指した様々な実験実習科目が配当されている。3・4年次では、所属した各研究室において、より高度な専門知識と技術の習得を目指した教育が行われている。そのような中で農学・生物学の基礎的実験実習科目とバイオセラピー学の専門的実験実習科目の関係性が不明瞭で、個々の教育内容が学科の教育体系とどのように連動性するか考慮されていなかった。そこでこれらの課題を改善し、各科目が有する教育の目的を明確化するとともに4年間を通じて実施される実学的教育の体系化を目指す。

**2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）**

## 1. 実験実習内容の見直しと体制の強化

実験実習検討委員会を設置し、実験実習内容の再検討を行う。実施内容と評価方法について学科会議で年度初めに意見交換と合意をはかり、年度末に各実習の総括をする。

## 2. 授業評価に基づくカリキュラム改善

授業評価に基づき体系的教育の実現の評価を科目の連動性の観点から検討する。講義科目に関しては専門6分野それぞれが検討し、実習科目に関しては実験実習検討委員会が検討する。年度末に改善を検討し、その内容をシラバスに反映させる。

## 3. 研究室における専門教育の特色の理解

各研究室で実施される専攻実習の年間計画を学科会議で確認し、各研究室の専門教育体制を学科内で相互理解する。

**3. 達成度を判断するための指標**

- ・ 実験実習検討委員会の活動状況
- ・ 実験実習に関わる学内外施設の利用状況調査
- ・ 改善された科目内容に関する資料（シラバスなど）
- ・ 学科会議等での本テーマに関する議事録の作成

**4. 成果・評価****■成果**

## 1. 実験実習検討委員会の活動状況

平成26年度に生物学実験および分野別基礎実験・実習の内容を抜本的に見直し、それぞれの科目の教育目標を明確に分けた。本年度はその施行にあたる年であった。担当する教員により事前に議論を重ね、初回のガイダンスから最後までそれぞれの実験・実習の意義づけを指導することができた。特に新たに試みた遺伝子実験では、学生の意欲的な取り組みも見られ、今後も十分な教育効果が期待される。今年度は新たなシラバスでの実施であったが1年間を通して混乱も無く実施できたことは評価に値する。さらに年度末には反省点を踏まえて

学科会議にて次年度への課題が話し合われた。【資料8】

## 2. 実験実習に関わる学内外施設の利用状況調査

学外で行われる実習においては毎年「学外実習願」（学科独自のシステム）を提出することとし、学科の承認のもと実施を許可する施策を講じた。【資料12】

## 3. 改善された科目内容に関する資料（シラバスなど）

### ・ 平成28年度生物学実験改訂の取り組み

平成27年度から新たな実習内容が実施されたが、授業と実習の連関による体系的教育の実現を目指してさらに改善へ向けた話し合いを進めた。具体的には生物学実験は観察力、思考力、表現力を養うことを目的として一般生物学に基づく実験内容に改変を進めた。【資料8】

### ・ 植物介在療法特別カリキュラムのあり方についての検討

園芸療法士を取り巻く社会環境変化に伴い学生ハンドブックにある本カリキュラムの取り組み方に改訂の必要性があることから、新たな時代に適合するカリキュラムに関する内容の説明と履修システムの説明を学科全体の協議で検討、改訂し、園芸療法士を志す多くの学生に対して十分な説明責任を果たす改善を実施した。この改善により履修を希望する学生は的確に本カリキュラムを履修することができるようになる。【資料9, 10】

### ・ 講義内容の改善に関する検討

講義について学生から寄せられた意見、感想を学科教員が吸い上げ、学科会議の場で改善に向けて議論を行った。特に非常勤講師に委ねている科目については、学科教員の理解が不足しがちになるため、学科会議に於いて評価責任者を中心に講義内容のあるべき形の検討と対策が練られた。【資料11】

### ・ 研究室における専門教育の特色の理解

年度当初に各研究室の年間実習計画（分野別実験・実習・演習および分野別応用実験・実習・演習に該当）を学科会議に提出し各研究室で実施される教育内容の周知を図った。植物介在療法特別カリキュラムの検討においては、これまで該当研究室に管理運営を委ねていたシステムを廃し、学科全体として内容に対する理解と管理運営を行っていく方針に改善した。年度途中には学科開講科目の全シラバスを回覧し、第三者による閲覧と意見を聴取する機会を設け教育内容の相互理解に努めた。これらの対策によりこれまで各研究室のみに委ねられていた教育方式を改善できるようになり、本年度は学科全体の教育システムに対するある一定の共通認識を持つことに成功した。【資料9, 12】

## 4. 学科会議等での本テーマに関する議事録の作成

本テーマを実践する取り組みについて会議で話し合い確実に実行に移した【資料8, 9, 11, 12】

### ■評価（5～1で記載してください）

4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた。

## 5. 課題及び改善事項

授業評価に基づくカリキュラム改善について

講義科目の授業評価は個々の教員の対策に委ねていたため、学科として協議する機会を設けることができなかった。学科独自に実習科目に対する評価と学生自身の理解に対する評価を行うシステムを構築し、教育の効果を諮りつつ改善を行っていくことが今後の課題である。

## 6. 平成28年度への継続の有無

有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

資料 8 「実習内容の見直しと体制の強化」に関する学科会議議事録

資料 9 「授業評価に基づくカリキュラム改善」に関する学科会議議事録

資料 10 学生ハンドブック「植物介在療法特別カリキュラム」の改訂（β版）

資料 11 「授業評価に基づくカリキュラム改善」に関する学科会議議事録

資料 12 「専門教育の特色の理解」に関する学科会議議事録

## 平成27年度活動報告書 (3/3)

学部・委員会名 農学部バイオセラピー学科

学部長・委員長等氏名 宮本 太

担当所管

テーマ 学部・大学院の運営連携による魅力的教育構造の構築

## 1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）

これまで学部と大学院の組織運営は独立に行われ、両組織の機能的連関において2重構造の弊害（周知情報の重複、伝達ミスなど）が生じていた。また、一方で近年は専門基礎教育を担う学部と専門発展教育を担う大学院の位置づけによる学部から大学院までの一貫した教育体系の構築が重要な課題となり、それを目指した両組織の運営体制の改善が求められている。この改善は学部学生への大学院教育の価値とその魅力の発信につながり、大学院の定員の充足と研究業績の増加をもたらすと期待される。本テーマにおいて学部と大学院が一体となった機能的な運営体制の構築を目指す。

## 2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）

## 1. 学生指導および運営に関わる情報共有システムの改善

学科教員全員が必要な情報を確実に共有できるシステムを構築する。学科長、主事を中心に検討する。

## 2. 学科・大学院の組織運営の一体化

学部から大学院教育につながる体制を構築するため、学科および専攻内会議を一体化する。年度開始より両会議を連動して行う。

## 3. 教員の研究力の向上を目指した学外資金の獲得

大学院研究の高度化を目指し、文部科学省研究助成金などの学外資金の獲得のための申請率向上を目指す。

## 4. 学部学生への大学院教育の発信

学部学生の大学院進学を向上させるために、大学院中間発表会を活用する。同発表会を学内掲示版、必修講義科目等で学部生に広く紹介し、自由討議性のポスター発表会を通して大学院研究の魅力を伝える。

## 3. 達成度を判断するための指標

- ・ 諸会議（合同学科長会、教授会、農学部連絡会議、学科会議、専攻内会議等）議事録の作成
- ・ 運営体制改善において新規に導入したシステムに関する資料
- ・ 科研費への応募および採択状況に関する資料
- ・ 大学院中間発表会の周知計画、実施記録の作成と次年度に向けての総括

## 4. 成果・評価

## ■成果

## 1. 学生指導および運営に関わる情報共有システムの改善

合同学科長会、合同教授会、大学運営会議、農学部長との打ち合わせ、農学部学科長会などの会議の議事録および報告事項は、迅速にポータル回覧で全学科教員に配信し、学科運営、学生指導に必要な事項について情報を共有化した。さらに重要事項においては学科会議で再度確

認し周知徹底した。このような工夫により前年度まで毎週行っていた学科会議を隔週で行えるように改善し、各教員の教育・研究にあてる時間を確保することで学生指導の充実化を実現した。また、出張願など諸書類に関する学科長の押印書類のやり取りに関しては、学科専用文書交換クリアファイルの導入および文書回覧袋による回覧システムを導入することで、情報共有を簡略し事務処理を軽減した。学科運営に関わる諸事項とその対処について教員全員が共通認識をもってスムーズな運営を実施した。【資料 13】

## 2. 学科・大学院の組織運営の一体化

これまで学科と大学院専攻内会議は独立に行われていたが、これらを一体化し、専攻の指導教授および授業担当者以外の学科教員も会議に参加するシステムを導入した。これにより両組織の運営の効率化が図られ、さらに学部と大学院を一体に考えることで今後の教育のあり方について有意義な検討が進められた。検討の成果をもとに学部学生に対して学部教育と大学院教育の違い、高度な専門教育の魅力を伝えることができ、平成 28 年度入学大学院入試の受験率増加といった成果を上げることができた。【資料 14, 15】

## 3. 教員の研究力の向上を目指した学外資金の獲得

学外資金を獲得することによる学科の研究力の向上を目指し、学科として積極的な外部資金への応募を促した。その結果、文科省科学研究費申請に対し、学科専任教員は平成 27 年度 12 人在籍しており、2 名が科研費の継続課題を有し、9 名が科研費申請を行い、教員の学外資金に対する意識の向上が見られた。【資料 16】

## 4. 学部学生への大学院教育の発信

学科会議（専攻内会議）にて大学院への進学者を増やすための検討を行った。【資料 14】学部生に対し大学院生の中間発表会および修士論文発表会を学生ポータル、学科掲示版などで広く周知した。積極的な大学院研究の周知の効果として前年度の博士前期課程受験者が I 期、II 期合計で 4 名から今年度は同 11 名と増加した。積極的に大学院で学ぶ意義を学部生へ伝えることで今後も大学院進学者を確保していけると考えられる。【資料 15】

### ■評価（5～1 で記載してください）

5 方針に基づいた活動ができ、目標に対する達成度がきわめて高い。

## 5. 課題及び改善事項

本計画は組織運営システムの改善をはかり成果を上げたと考えられる。

## 6. 平成 28 年度への継続の有無

無

学科と大学院を連携させた学生指導および運営体制は本年度の計画により確立できたものと考えられる。今後もこのシステムを運用していくことで学部から大学院へと続く体系的な専門教育が実践できると判断し、継続を行わないこととした。

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

資料 13 「学生指導および運営に関わる情報共有システムの改善」に関する資料

資料 14 「学部学生への大学院教育の発信」に関する学科会議議事録

資料 15 「大学院受験者数」に関する資料